

健康法あれこれ

木 口 敏 郎

1

生きとし生けるもので、自己の生命が一瞬でも一時間でも長からんことを願わぬものはずない。これは生命の本能的要求である。しかもこれはほとんど盲目的の我執とさえいえる。生物学的に考えても精子は何億という仲間との競争に打ち勝って、卵子の力を借りてこの世に人間として生れたのであるから、率からいえばオリンピックのマラソン競走どころか、宝くじの当選率より遥かに低いものだ。このことをわれわれの内在生命は知っている。この稀有の一回限りの生命の尊さは他

に比較できるものがないことを本能は知っており、われわれはこれに盲従せざるを得ない。

そこで昔から何とかして長生きせんもの種々の健康法なるものが考案されてきた。そして死に頻して自己の生命を救うために独りで考案してそれに成功した黒住教祖の太陽療法から白隠禅師の数息観念法というような悲壮なものから、専ら人を救う目的で考案された耳鼻通根法、藤田式息心調和法、岡田式静座法、梅田式静座法、生長の家の神想観（これは宗教的要素が多い）などかぞえれば相当な数にのぼる。これらの多くは禅宗的打坐の

要素をもって、心と身体の調和を呼吸法で成就しようとするものである。丹田に気をあつめるといふ点ではどれもほとんど一致しているが、多少方法が違うだけである。禅宗の坐禅の目的は第六、七識を焼尽して第九識の自由を得ようとするものであるが、これは健康のことを余り考えていない。精神の修養に重点がおかれているから健康にはよくても健康法とはいえない。

私が小学生の頃、修身のテキストに貝原益軒が冷水摩擦を励行して八十幾歳の齢を完了したという文章が、日の出を背景にして井戸端で冷水摩擦をやっている先生の挿絵がでて



いたのを記憶する。その頃は八十という年齢は何か遠い考えられないような所にある気がして、ただ貝原先生という人は偉い人だと思っただけだ。私の知っている人に七十歳で過去五十年間冷水摩擦を實行してきた人があつたが、その根気の良さにただ頭が下るばかりである。その人の嘆きはタオルが無数に必要だということである。寒中に冷水浴を實行する人があつたと聞いているが、思つただけで鳥肌になる。外国からきた健康法は体操が加味されているものが多く、その代表は有名なベネット女史の方法である。彼女は自己の創案になるベネット式体操を續けて七十歳で三十歳位に見えたというから、美容体操の元祖といつてもよい。これはかなり激しいもので凡人には続けられない。調息法でもなく体操でもないものは有名な西式健康法である。万病は背柱の狂いから起るとというのが同氏の主張で、毎日これを矯正するために、自己の背に、さし指を半径とする桐枕をして、ベニヤ板に直接寝よというのである。自分も約二カ年実行したが、思う所あつて板の床を廃止した。夜中にはほとんど寝返りがうてないのである。現在流行の化学合成品による綿の布団に

寝ることは、西氏からいえば自殺行為であらう。綿のせんべい布団がやはり一番健康によいように思う。西洋ベッドは思つただけでもやり切れない。しかし西式健康法はすべてが唯物的であつて精神面からの考慮はなんらなされてない。

2

ここ十年位の間に食事の改良による健康法が旧式の静坐法にとつて變つたような観がある。その最初のものと思われるものにハウザー式食事法がある。これは小麦の胚芽とか黒砂糖の使用が重視され、種類の異つた食物を摂ることを推めていたように思う。その頃にすでに日本食養道というものがあつて、野菜でもその土地でとれるもの、しかも連作可能のものもつともよい、台湾のバナナを食つたり、南極産の鯨などを食うのは道に反する、柿の果実は猿や鶴の食うものであつて、人間の手のとどかない所にできるものは食養道に反するといふような意見である。しかしこれには科学的な論拠はない。パーモント療法はアメリカのパーモント州の地方民の食養道を老齡の医師が体験から書いているもので、同

地方の人々は豊かな蜂蜜のとれるところからこれに食酢（リンゴ酢）を加えて平素飲んでゐるということである。コップにリンゴ酢を三分の一位入れて、適量の蜂蜜を加え、湯を入れて飲むとたしかに美味で、夏季など氷を入れるとよい清涼飲料である。橙酢に砂糖を入れて飲む風邪薬よりよほど美味である。これには科学的な根拠があつて、酢やリンゴの酸は疲労によつて生じた筋肉内の乳酸を速やかに体外に排除するというものであり、わが国でも酢による健康法の本が出版されている。パーモント療法は更にこれに昆布の沃度による健康法も併せ述べられている。昆布は週に一切二切でよいらしい。酢といえば、生野菜にフレンチソースをかけて食べる普通のやり方は理想的である。フレンチソースには植物油が用いられており、サラダ油は血管内の余分のコレステロールを取り除く作用があるらしい。この最高のものは綿の油である。その昔、二本博士は二食主義を唱え、世人でこれをしたがうものが多かつたが、これは玄米食をやつていた戦国時代やそれ以前の二食主義への復帰で、栄養素をとり除いた白米の二食では栄養不足になつてしまふ。玄米を

よくかんで二食にする主義だったと記憶するが、現在でも実行している人があるらしい。玄米には胚芽は勿論のこと、マグネシウムという緩下剤まで配慮されており、ないものは塩分だけだというから健康によいと思うが、玄米は現代人には口あたりがわるい。白米の大食と白砂糖のとり過ぎによつて血液に酸過剰を起し、塩分の摂りすぎで高血圧病になり脳卒中を起す人が多いから、すべからく人間は血液を弱アルカリ性にするため緑色の野菜と、果物を大いにとるべきであると多くの食養道の書物は書いている。リンゴや酢の酸は体内にはいつでもいわゆるアチドーシス（酸過剰）を起さず、反対に血液の弱アルカリ性を助成するものらしい。西洋の諺に、「毎日一ケのリンゴは医師を遠ざける」とあるが、一つの証拠であろう。無病生活法とか、成人病に関する書物の基底になっている主張は、血液の浄化に関するものといつてよく、食物に関する注意は血液の淀みなき流れと浄化作用を起す原理についての説明が多い。野菜療法などは生野菜の治療作用について、野菜の種類に応じて説明されており、たとえば糖尿はインシュリンの注射よりもインゲン豆

のジュースを飲む方が有効であるとかの説であり、医師の書いたものであるから信用度が高い。ニンジンやキャベツは天与の薬剤で胃や肝臓のわるい人には靦面にきく。最近の電気ジュースの出現で実に簡単な操作で作ることができると。生野菜は美容と健康のもとであるから、さらにこの種の研究は進められるものと思われる。

これらの種々の方法に加えて、最近の医薬による健康法—たとえばビタミン類の摂取やアスパラギン酸による中間代謝改善法などは大方の人々のすでによくご承知のことであり常識として使用されているが、ビタミンDなどの過剰摂取は却つて病気を起している。

旧式の息心の調和といい、食料改善によるものはそれぞれ、その道の先達が苦心慘澹の実証をもつて世間に発表したものであるが、これらのどれもが万人に同様の好結果をもたらすものとは考えられない。自分で実行して初めてそれがもつとも自分の体質や氣質に適したものであるかを発見しなければならぬ。薬剤にしても適不適があることはすでにわれわれの知っている通りである。

3

セリエ博士の提唱したストレンス病理説は、病理に対する新しい考え方であるが、われわれの日常生活における感情処理がいかかわれわれの健康に関与しているかは今まであまり考慮されなかった。立腹することによつて食道や腸に結節を引き起し、続いて防衛手段のために血液を凝固させるホルモンを身体がつくり出すということや便秘を引き起すというようなことは以前にあまり考えられていなかったことであるが、こうした感情と健康に関する研究が進められるならば人間はますます長命することになると思われる。

人間は精神と肉体が漠然と入り混つた所に生命を保っているのであるから、唯物的に人間処理を考えることは過りであろう。精神と肉体は相互に影響し合つてそのバランスの良いときに健康を保ち得る。キリスト教や仏教の先達に驚くべき高齢の人があるのは、深い信仰によつて精神の深い平和と安定を得て、凡人に襲いかかる精神的ストレスを巧みに解除あるいは超越して完全な精神生活を行い、一方において肉体が物理的にまた栄養的に理

想に近く取り扱われるところから理想的パラ
ンスを得た結果としか考えられない。こうい
うことが判っていないが実行できないところ
に凡人の悩みが生じる。

適度の日光浴といっても、都会の空は濁つ
て適度の紫外線は地上にとどかず、新鮮な空
気といっても、交通禍の現在では都会の空気
は自動車の排気ガスに充ちあふれ、新鮮な水
といつても都会の水道はカルキと錆の臭にみ
ち、新鮮な野菜といつても畑でも耕やせぬ限
り、市場では他地方から出荷された古いもの
しか買うことができないのが現状であれば、
凡人の悩みはますます増加するばかりだ。ス
トレスは積り放し、睡眠もまたバイクの音で
かきみだされるとあつてみれば、ヘンリー・
アダムズならずとも中世紀が恋しい気持にな
る。これらのものは健康によいと判つていて
も実行不可能に近いから、迷惑するのはお互
いであることを悟り、個人が各自健康のこと
を考へて善処するより他に方法はない。ぜい
ぜい早寝して、早朝の太陽と空気をたのしみ、
ぜいぜい新鮮な栄養豊かな食物を腹八分にと
り、ぜいぜい清浄な水のみ、近代的乗物を
できる限り敬遠して歩行によつて脚力保持に

つとめ、気分をいつも爽快にもつよう修養し
て、常住坐臥気を丹田に集中し、ぜいぜい横
隔膜を使って呼吸し、姿勢を正して背柱を伸
ばし、上半身の力を抜く工夫をこらし、体重
は四十歳を過ぎれば三十歳台の平均体重に保
ち（身長から一〇〇を引いて、残りに〇・九
をかける、あるいはそれより下ることはあつ
ても上回つてならないとき）、快食、快眠、
快便に意を用いるならば、われわれは天与の
齢を完うできるらしいということが判つてい
てもなかなか実行できない。それというのが
中には怪物のような人があつて、これらの逆
を行つて、「逆も真なり」を実証している人
もあるから、ついわれわれは妥協心が出ても
との木あみになり易い。

4

ギリシャ人の平均寿命は十八歳であつたと
いうことであるが、約二千年後の現代人が、
和讃の「人間僅か五十年、露よりもろき身を
持ちて」の嘆きを遙かに突破して七十歳近く
まで生きのびるようになり得たのは、誠に御
目出度の限りで、いわば人智の勝利である
が、なお人間は医学的にいつても百二十五歳

までは生きる可能性があるというから、今後
ますます人々の齢は延びることであろう。

そこで最後に私のいたいことは、このよ
うに先人や現代の医学界の錚々たる学者が、
人間生命の延長や保護に寝食を忘れ、一つの
生命をとり返すために全国から血液を集めて
苦しめているのに、一方ではいかにして大量
に人間を殺戮すべきかを寝食を忘れて研究工
夫している現実の矛盾である。自国だけの国
民が可愛いという考え方は判らぬでもない
が、およそ歴史において、憎悪という好まし
からざる感情から生み出された武器が一度で
も使用されずにすまされた例はない。アメリ
カの憎悪は二個の原子爆弾の爆発によつて消
えたかも知れないが、また姿を見せぬ敵のた
めに積み重ねられた全世界の憎悪の醜怪な塊
が全部一カ所に集められて、同時爆発すれば
二十三度半傾斜している地軸は十度位変化す
るのである。神は人間に選択の自由を与え
た。だといつてこの自由を憎悪のみに用いる
なら、現代文明社会は墮落した罪を自らの身
に刑罰として課さねばならぬ。

（文学部教授・近代アメリカ小説）

単盲象を撫でる

三木英雄

1

同志社大学にも待望の電子計算機が導入された。しかもハリス理化学校時代の先輩、加藤与五郎先生の御指導のもとに、わが国で開発されたパラメトロンを素子として利用しているものであるということは、何かしら親近感を覚える。大学の研究施設として電子計算機を持つているということは、も早常識であるとは言われるものの、恥しい話だが、わたくしなど電子計算機については、厄介な計算を、大へんな正確さで、しかもものすごい早さでやっつてのける、人間の考えたものであ

りながら人間以上の能力を持った怪物であるといった程度の知識しか持っていなかった。

この全くの盲のわたくしが、設置準備委員の一員に加えられ、設置計画に参画したのだから、全く冷汗ものである。責任の万分の一を果すべく、これから初めて利用しようとするズブの素人の利用者の一人として、試験台に立たされたつもりで、他の委員の皆さんに教えられながら勉強してみることにした。

この七月には学内で講習会が開かれ、五十名を越す学内教職員の諸兄と一緒に、はじめに電子計算機とはどんなものか、どのようにして使用するのかと言った話を聞いたのであ

るが、最初のうちは聞きなれない術語ばかり出てきて、正直のところさっぱり判らなかつた。いろいろと説明を聞いていて、おぼろげながらつかめたことは、この怪物は、怪力をもっているが、底ぬけに従順で、言いつけられた通り馬鹿正直に働く。しかし実に気の利かない奴で、言いつけられないことは一切やってくれないということである。

電子計算機はすでに博覧館(旧同工館)の四階に据えつけられ、十一月九日から一般計算の受けつけを開始しており、その利用方法は「利用のしおり」に示され、使用方法の詳細は「計算機マニュアル」にのべられている。とはいっても、自身の体験から言つて、なかなかとつきにくい点が多いので、私の得た印象の一部を御披露し、御参考に供したいと思う。もつとも、きわめて短期間に、巨大な、しかも複雑な計算機の、ほんの一部を撫でてみた感想であるから、正鵠を得ていない恐れは十分に考えられるので、どうかそのつもりで御覧いただきたい。

2

計算機として、われわれすぐ頭に浮ぶの

は、事務室や研究室でおなじみの、イボがたくさん出ている、横にハンドルをつけたもの、計算しようと思う数値に合せてイボを動かす、ガリガリとハンドルを廻せば答が窓に現われる例の機械である。この頃はだんだん便利になって、イボをゴチゴチ動かさなくても、ボタンをチョンチョンと押し、掛算や寄せ算のキーを押せば、機械の中のモーターが回転して答を出してくれる、場合によっては活字で印字もしてくれるものもかなり広く使われるようになって来た。この種の計算機では、計算しようと考えている数値を与えるのも、引き算か割り算かを選択するのも、すべて機械を使う人が判断しながら直接指先で行なうのであって、時間がかかるが、反面考えている余裕がある。もちろん電子計算機においても、機械的計算機と同じような使い方もできる筈であるが、数値をいちいちボタンでセットしていたのでは、新幹線の枕木の上を歩いているようなもので、せつかくの計算機が泣いてしまうであろう。普通は、あらかじめ、計算すべき数値を穴あきテープに穴の形で与えておいて、(もっとも、われわれは日常十進法によって数値をあらわしているの

で、0-9までの文字を並べて数値をあらわしている)のであるが、電子計算機では二進法が使われるので、0か1、換言すれば穴が無いかあるかで数値があらわされる。だから、十進数で100という数値は、二進法では $110100(=1 \times 2^6 + 1 \times 2^5 + 0 \times 2^4 + 0 \times 2^3 + 1 \times 2^2 + 0 \times 2^1 + 0 \times 2^0)$ と書かなければならない) テープの形で機械に入れてやる。それと同時に、掛けたり加えたりする演算記号も同様にテープにしておかなければ意味がなくなる。演算記号も機械は穴があるか無いかで判別するのであって、われわれが日常使用している記号とはおよそ姿の異なったものになってしまう。

その代り、組み合せに用いる数字の数を増せば、普通の演算以外に、もっとバラエティに富んだ仕事をやらせることも可能になってくる。これらの記号は「機械語」と呼ばれるが、従来のわれわれの知識ではとうてい理解できない暗号のようなものになってしまふ。

3

また、電子計算機では、計算結果は機械的計算機のように数字が窓に出て来るようなこ

とにはならない。もっとも、二進の形で、ランプの点滅として眺めることはできるが、とてもわれわれの実用には供し得ない。それで普通には、十進数に再変換してタイプライターで印字させることになるが、そのためには、それなりの指令を与えてやる必要が生じる。結局、電子計算機で計算を行なうためには、計算の開始から終了に至るまでのすべての過程を一連のテープにまとめておかないと、電子計算機本来の機能を発揮できないことになる。そして、機械的計算機の場合のように、出てきた結果を見てから、次の計算方法を選択決定するわけにはゆかないから、あらかじめ、計算の過程で生ずるであろうあらゆる場合を検討し、それぞれの場合に対する処置を決めておかなければならない。このような計算方法の計画をたてることを「プログラミング」と呼んでいるが、このプログラムを作ることが計算機使用の第一歩であるといえよう。許された、限られた演算の種類を適宜組み合わせながら演算計画をたてることも決して楽な仕事ではないが、それにも増して不便なのは、数値として二進数しか使えず、演算実行の命令が、機械語という機械特有の

「言葉」でしか通じないとすれば、計算機という怪物をわれわれの思い通りに手なずけ、働かせることは、極めて厄介な骨の折れる仕事であろう。幸い、先達の人々が苦勞して調教し、数値を十進数で与え、演算命令も暗号的な1と0の組合せを直接使わなくても、もう少しわれわれのつつき易い記号で指示すればことが足りるようにしてくれている。たとえば、加算の機械語は「0001000」であるが、これを記号語で「A」(Addの頭文字)と示せばよい。また割算の「0011100」は「D」(Divideの頭文字)であらわされるといった調子である。この記号化によって機械語の自由度は大幅にとり除かれているのであるが、それでもなおわれわれが小学校いらい習って来た数学の式とは相当様子が違う。

先達はこの点を解決するために努力を重ね、「自動プログラミング」という至極便利なるものを考えてくれた。これは、一定の約束のもとに、われわれが日常使い馴れた数式や言葉に近い形で書かれたプログラムをタイプライターで書き、同時に穿孔されて出て来るテープを電子計算機にかけると、計算機内で自動的に機械語に翻訳され、演算を実行して

くれる仕組みになっていて、利用者の苦勞を大幅にとり除いてくれる。

しかしながら、計算機本来の、馬鹿正直で気の利かない性質は変えようもない。計算機にわれわれの意図するところを充分にのみ込ませるためには、計算機の理解しうる「言葉」でこれを指示しなければならず、この言葉には極めて厳格な約束、いわゆる「文法」があり、使用できる表現方法も限られている。だから表現がほんの二カ所約束と違っていても、あるいはその配列(プログラム)に何らかの無理があつてもいけない。たとえば、コマを入れ忘れても、カッコをつけ忘れても、計算機は「文法ミス」として受けつけないし、配列に無理があつても「プログラム・エラー」として計算を進めてくれない。

十月下旬に、計算機が動くようになった時、さきに講習を受けた者が、実地に実習を試みる機会を与えられた。私もその一員として、簡単なプログラムを準備し、テープを作成して計算機にかけてみた。余程注意して準備したつもりであるのに、数カ所に約束に従っていない「文法ミス」が発見された。こんな場合にも計算機はなかなかよく仕込まれて

いて、「文法ミス」があつた場合にも「どこどのような種類の約束違反がある」ということを、タイプライターで打ち出すようになっていて、われわれのプログラムの正誤推稿を助けてくれるのであるが、ここまで来るとわれわれが機械を使っているのか、それとも機械に使われているのか、訳が判らなくなってくる。結局計算機を使うということは、この「文法」をまずマスターし、その「文法」の範囲内で、われわれの意図に沿って計算機を操縦することになりそうである。

4

非常に難解な問題にぶつかったとき、「電子計算機にかけて考えさせたら」ということをよく耳にするのであるが、電子計算機はそんな僥倖なことは絶対にやってくれそうにない。計算機は非常に敏捷に、われわれに代つて使い走りをしてくれるだけであつて、その使いの道すじはもちろん、使い走りに行った先々のすべての様子、行く先々で起るであろうすべての事態について、われわれがまず熟知しているのだけならば、十分な成果を収めることは覺つかない。こんな方法でやれば間

題が解けるという筋みち、それは一すじ繩で行かない場合が多いだろうが、考えられるあらゆるケースについての万全の構えができて、時間さえかければ、紙と鉛筆で二、三年もかかって解答が得られる筈だということが判っているようなものがあつた場合、面倒な計算部分を計算機に任せると、怪力を発揮して、数時間あるいは数分間で結果を出してくれるのであつて、これが本当の計算機の使用法ではないであらうか。

最近、各方面で能率化、合理化が叫ばれ、できるだけ多くの手数のかかる部分を機械化する努力が払われているが、何もかも機械に任せてしまつて、人間様は居眠りをしながら飯が食えると考えるのは、根本的な、とんでもない大間違であつて、これらの機械を使うのはあくまでも人間様であるということ、これらの機械を使うためには、人間たるもの、より一層考え、勉強し、研究しなければならぬということとは決して忘れてはならないと思ふ。そうしなければ機械に追いまわされ、こき使われるまことに哀れな人間ができ不上ことであらう。

(工学部教授・計測工学)

電子計算機利用のしおり (抜すい)

機種 HIPAC・103

設置場所 博達館(旧同工館)四階

運営方法 HIPAC・103によつて

扱ひうる各種計算を受付けます。ただし、

① プログラムの内容は研究、学生教育および事務計算のため必要なものに限ります。

② 計算内容は学内の利用者に公開されることを前提とし、特別な秘密保持の考慮はいたしません。

③ 計算にあつては、プログラミン
グは利用者各自が行ひ、コードチェック、オペレーションは原則として計算機センターで行ひます。

利用者の資格

① 同志社大学の教職員であつて、計算機センターの名簿に登録されている

もの。

② 同志社大学学生が論文作成のため利用する場合は、計算機センターに登録されている指導教授を通じて申込むこと。その場合、実習費として計算時間一分につき二〇円をいただきます。

学外の利用者

同志社大学に関係ある個人または会社が利用を希望する場合は、登録者の紹介により、計算機センターに申込んでください。計算料金は計算時間一分につき二〇円とし、それ以外の使用料金は別に定めます。

利用手続

利用手続の詳細については電子計算機センターにお問合せください。

同志社大学電子計算機運営委員会
同志社大学電子計算機センター

日米の相互理解のために

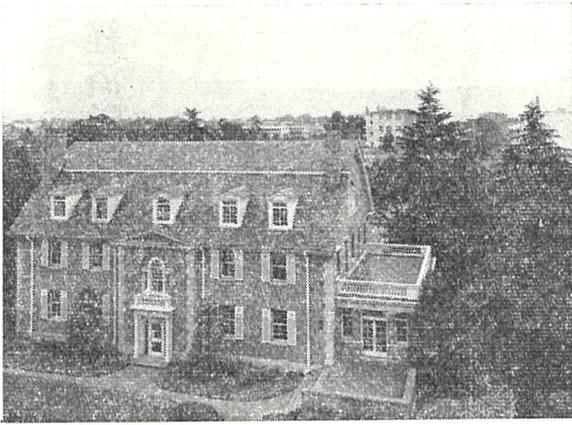
John Neumann

日本からのビザが遅れたため、私はアメリカをあわただしく発った。既に航空便を送っておいたものの、そのような次第で私の飛行機がいつ着陸するのか誰か知っていてくれる人がいるだろうか不安だった。税関での検閲を終え、私を連れていってくれるよう誰かに電話をしなければ……と思いつながら、スーツケースとか荷物とか航空会社がくれたバッグとかテニスラケットをもつてドアから歩き出した。すると、「歓迎 ジョン・ニューマン / アーモスト館」とよまれる大きな紙を見た。私はびっくりりし、かばんをおろして笑顔の人々と握手をした。九月初めのそういった体験以来、日本において皆から非常に温く歓迎されている。特にアーモスト館において。

英語を教える新しい生活、十七名の日本人学生と生活することはどんなことだろうかと私は当然考えてきた。私の喜びでもありかつ驚きでもあったのだが、それは全く私にとって活気に満ちたものである。日本、日本語について学ばない日は一日たりともない。ほとんどの時間が興味深いものであり、励まされるものであり、また私がかつて経験したことのないものであった。東西間の相違は夜更けの議論の中に、電車の中で、私の教場において現われているようである。私は歴史的、現代的双方の政治、社会、宗教活動と日本の芸術の形態（民芸、音楽、踊り、演劇）に大変興味を覚えている。京都は日本文化

を知るに適した場所であり、アーモスト館の学生がいるような方法で骨折ってくれる。私の日本語についての知識は、日本人がインディアンの言葉について知っていると同じ位の程度である。（進歩すべく努力しているのだが）学生が私をいろんな寺や博物館につれていって、英語でしてくれる説明や解説を非常に高く評価している。ほとんどの観光客が三日間で「すべて」を学び取ろうとしているのに比べて私は全くぐまされた方法で京都についての何かを知りはじめている。日本、アーモスト館で六週間をすごした現在、ある種の欲びとか興奮は色あせた。御承知のように、アメリカ人にとっては日本はとてもエキゾチックな、純外国的な、神秘的な国としてうつる。アメリカ人は、しにとまどい、さしみに身ぶるいし、また日本人はすべての顔が同じにみえると考えたりする。しかし、私は最近フォークでごはんをたべることにとまどうし、おすしは好物だし、そしておそらくアメリカ人はすべて同じ顔をしているように見えはじめ

る。私に課せられている重要な一つのこととはわれわれの相違と類似を理解しようとする事である。時として、私は愛とか尊敬、責任、恥辱についての意見が反対の結果に落ち着くことを感じる。私はそのような問題を語りあうことが非常に大切だと思う。そしてアーモスト館の



アーモスト館 (学生寮)

学生はそうすることに意欲的である。私にとつては彼らの考えとか意見が興味深いし、また尊敬もしている。と同時に、アーモスト館がすべての日本人学生を代表するものでないことも確かである。ゆえにアーモスト館外の学生との交流をも望んでいる。

私の出くわしたほとんどの日本人は私がよい思い出、快い経験、日本および日本人についての積極的な意見を家へもつて帰るよう欲している。私は必ずやそうするだろう。米国への私の手紙が既にこのことを示している。しかしながら、御承知のように、誰も完璧ではありえないし、また国についても同じことがいえる。自分の国を離れることは、その欠点、弱さ、また強さをもはつきりと見る機会を与えられたことになる。あなた方も日本をしば

し離れば、同じことを経験するでしょう。そして私の興味をひいた問題は次のものである、すなわち、日本人が日本人自身および日本をどのように評価しているのかということ、また、アメリカ人および米国に対する日本人の印象を理解しはじめること。もしこの興味がずっと続くならば、われわれは卒直に、真実をもつて開きあつて——相互の誠実さと興味を貫いて意見の交換がなされなければならぬ。私はこれがアーモスト館ではきわめて可能であることがわかり、また同じ興味を抱いているアーモスト館外の日本人々と大いに語りた。暫しの間、外国でゲストになつてゐることは大変結構なことであるが、私はむしろ長い間の友人でありたい。

アメリカ最高峰の詩人の一人であるロバート・フロストはかつて「とられなかつた道」"The Road not Taken"と題してかいた。森の中で二つの道に分れていた。一つの方はよくならされており、他の一つは全く新しく旅することは無理な道だった。彼は第二の道を選び、そして「それがすべての相違をもたらしした。」私はあなた方とアーモスト館の助けて、その同じ選択をしようとしてゐる。いっしょに旅をしよう。おそらく、われわれはいくつかの発見をするだろう。助けあい、傷つけあつて。どんな場合であろうと、われわれは結果として強くなると私は思う。

(ジョン・ニューマン、アーモスト大学フェロー)

岡島貞一郎訳

経済学部「存在理由」

小野 高 治



1

「一体、君たちは何のために経済学部に入り、何を目的として経済学を学んでいるのか。」私はこのような質問を、三年と四年のゼミナールの学生に、最近投げかけてみた。その答えは、予期に反して、いや、予期通りという方が正しいかもしれないが、まことに低調なものであった。およそ、そういった目的について、根本的に考えたことがない、というのが大半であり、敢ていえば、経済学部は学生の質が高く、就職に都合がよいと聞いていたとか、工学部に行くためには理科系が不得

意であり、法学部や、商学部、ことに文学部は、特殊過ぎて一般的なでないような気がしたとか、経済的知識を得たら営利的社会に出てから有利に思えたとか、などが入学の動機であり、また現在、経済学を学んでいる目的については、卒業に必要な単位だという以外にはないというのであった。もちろん、こうした答えが満足な解答になるとは、彼らも考えてはいない。就職の資格をとるためにだけ入学したといえ、何かうしろめたい気持がするし、法学や商学より一般的と考えていた経済学なるものも、専門に入ってみると、余りにも特殊的、抽象的で、およそ卒業後にすぐ

役に立ちそうなものはほとんどないということも、三年生にもなれば解ってきている。経済学の中心となるものは、何といっても理論であろうが、これがまた、経済学を文科系の学問と期待していた学生には、ひどく理工学的で、サークル活動などに比べるまでもなく、砂をかむがごとく甚だ興味に乏しい、ということは一一般学生の身にしてみているところらしい。それでもなお経済学を学ぶとすれば、卒業の単位として強制されているという以外にはない、まずこういうところが、同志社で「最優秀」とされる学部の学生大半が、頭をかきつつもらす意識であるらしいのである。では、このような解答が不十分であると考えれば、どのように考えるのが正しいのだろうか。私のこの問に対して、ある学生は、沈黙を破って恐る恐る発言した。「経済は人間の諸生活の中で他のどの部門よりも重要な位置を占めています。したがって経済学を学ぶことは、現実を理解するために、一番大切な意義と価値をもっています。これが経済学部に入つて、経済学を学ぶ目的であります」と。すると他の学生が反問した。「今の答えやったら、経済学は、法学や、政治学や、文学

や、哲学より重要であり、学問的価値が高い
う事になりますね。だとすると何を基準とし
て、価値の高低が決まるんですか」と。

すると前の学生は答えた。「経済生活がな
ければ法律も、政治も、いわんや文学などと
いう有閑人向きの分野もなり立たへんでしょ
う。だから経済学は、他の学問より、一番重
要な学問ということになります。」

また暫くの沈黙がつづいた後、第三の男
が議論に加わった。「いや、学問の価値とし
て、経済学の方が、他の学問より上だという
事はいえへんやろ。学問である限り、どの学
問でも学問する人には最高の価値があり、比
較はできんと思うな。」

すると第四番目の男が不満そうにと言
た。「そんなら、君は、たとえばやね、いも
りのしつぽを研究するのめやな、原子力や国
民経済のように人類の生命にかかわるものを
研究するのめやな、同じやいうのか。僕は経
済学が一番大切かどうか知らんけど、学問で
も一番上の方と、下の方との差はあるみたい
に思うな。」

「そやかて、原子物理を研究して人類を破壊
させるようなことをするより、いもりを研究

して、精力剤でもつくつた方が人類のためや
がな。」ここで爆笑がわいて、議論は結局、
何か焦点を失ってわけのわからないものにな
ってしまつた。

最近の学生は、一般に漢字に弱いせいか、
あるいは自分で思考する習慣がないためか、
概念を厳密に確定して使用するということには
非常に無神経である。これは左翼の議論好
きで、急進的な学生運動家も同様である。し
かし、そのため議論は奇妙な混乱や、とつび
な飛躍を生じて收拾がつかなくなる。前記の
議論も、私が読みやすいように多少アレンジ
したものであるが、この中にはいろいろの概
念上の混乱がある事に気づくであろう。私は
ここでアカデミックな学問論を展開するつも
りはないが、私がこの学生たちの議論のあと
で、どのように私の考えを学生に述べたかを
書かないならば、無責任というものであろう。

2

まず経済学が、他の諸学問に比べて価値が
高いかどうかという事は、誰も客観的に確定
することはできないことである。学問する主
体にとって、特定の対象がより興味と関心を

ひくという事はあるが、それは主観的、相對
的な判断で、客観的に必然的なものではない。
この点ではいもりのしつぽの切れかたの研究
も、ホッテンントットの文化人類学的研究も、
日本国憲法の研究も同じである。マックス・
ウェーバーが述べたように、学問研究の前提
にあるものは、「それから出てくる結果は、
研究者にとって何か『知るに値する』とい
う意味で重要な事柄である」ということのみ
で、その研究が他の研究よりも重要であるか
どうかは、学問上の手段を以てしては論証し
えないのであり、それは主観的に解釈され
るのみである。

もっとも、時代の情況の推移にしたがつて
特定の学問領域(分野)が、より多くの人々
の興味と切実な関心呼び起し、より多くの
研究者を集中せしめるという事は疑いえない。
例えば私の専攻している経済史学は、歴
史学が極めて長い伝統をもっているのに比べ
ると、極めて新しい学問である。歴史学は長
い間王侯、貴族、権力者の名をほめたたえる
物語りとして存在していたが、支配者層の生
活だけではなく、名もない庶民の台所生活が
歴史家の注意をひくようになったのは、市民

社会の成立以後である。この事は経済学一般についてもいえることで、古代から経済思想はあつたけれども、固有の専門科学としての経済学は市民社会の誕生と時を同じうするのである。またこうして歴史的に成立した経済学の諸専門分野においても、研究の「流行」があり、榮枯盛衰があることは例をあげるまでもあるまい。

このように時代と共に、特定の学問領域が繁榮し、他が衰退するという事はあるが、これは学問がおかれてゐる外的条件が、その学問のためにより有利(適合的)かどうかという事であつて、特定の学問自体の価値が高いかどうかという事とは別である。学問自体の内的な価値は、あくまでその研究成果によつて、すなわち対象の把ちえ方が嚴密、精確で、論理に矛盾がないこと、経験科学の場合には、そのうえ客観的(即物的)であることによつて決定されることはいうまでもあるまい。

ところで人々は、しばしば無反省にも経済生活は、社会における最も重要な分野であるという。しかしこの場合は、いかなる尺度に照して「最も」というのが問われなければならぬ。この点で日本では、マルクスの唯

物史観の通俗化した見解が悪い影響を及ぼしていると思う。それによると経済構造は歴史

・社会の下部構造で、法律、政治や、思想、宗教等の觀念形態は、下部構造によつて決定される上部構造に過ぎない。下部と上部には弁証法な相互関係はあるものの、結局は、経済関係が凡てを決定する最も重要な要素であるというのである。こうした要約はマルクスの本来の見解とかなり隔たつてゐるが、しかし通俗化されて、学生の中かなり漠然とこびりついている事は見逃せない。しかし、かりにマルクスの図式を援用してみても、下部構造は土台であり、土台はその上に乗せるものがあつて始めて意味がある。土台だけが独立で「最も価値がある」ものではない。むしろその上に構築されるものこそが目的であり、土台はそのための手段であつて、その限りで固有の重要性をもつてゐるに過ぎない。経済生活あつての文化生活だという事も正しいが、逆に文化生活あつての経済だという事も同様に正しい。私はマルクスの上部と下部の図式には元來批判的であるが、かりにマルクス主義に立つてみても、どちらが最も重要かというような答えは出ない筈である。それ

は卵と鶏の先後と似ている。

要するに経済も、他の文化諸現象と同様に、人間によつて営まれる文化現象の一側面であつて、経済学は自然科学を除く他の諸科学と共に文化科学の一領域を形成してゐる。マーシャルは経済学の目的は、人間の営みを研究する事であるといったが、正に経済学は経済的な欲望の充足との関わりにおいて人間の営みを研究することである。しかし経済的欲望が、人間の欲望価値体系の中でどのような地位づけをもつかは、経済学が本来知る所ではない。

また、この場合の人間は独立した個人ではなく、複雑な社会関係の中における人間であり、経済現象はロビンソンクルソー的に孤立した現象ではなく、社会現象である事において、経済学は法学、政治学、社会学等と共に社会科学の一分野である。そして最後に、この人間は歴史的存在であり、経済現象は歴史現象であることにおいて、経済学は歴史科学の一分野でもある。このように、経済学は、その研究対象が文化的、社会的、歴史的な人間の営みである事を忘れてはならないであらう。経済学が今日の学生にとつて、何か

よそよそしいものに映るのは、経済学がややもすれば人間不在の学になってしまい、単に貨幣的諸数量間の関数的な因果関係の究明に終り、それが本来もつ歴史的、社会的、文化的な意味連関が忘れられてしまうからではなからうか。

このように説き来って、経済学部に入って経済学を学ぶ意味も、明らかになってくるように思われる。

経済学部は、社会に出てから即座に役立つ、実用的技術を教える所ではない。もちろん、すべて科学には応用面をもっており、一般人はそれを科学の目的のように考え易いが、科学本来の目的は、経験的現実を客観的に確定することであり、学生はこの事の訓練を通して知的な誠実性（例えば、たとえ自分のイデオロギーや利益にとって不都合であっても、事実は事実として承認する徳性）を養い、もの事をより客観的に、より分析的に、より批判的にみることを学ぶであろう。この点において他の諸学部と本質的に異なる所はない、ただ研究対象が相違するのみである。経済学部は経済的知識を教えること自体を目的とするのではなく、経済的知識の修得を媒介にし

て、科学的な態度を修練する所だと思ふ。しばしば一般教育科目だけが、「教養」科目として、人間形成のために重要されるきらいがあるが、専門科目もまた人間形成の場である。そうしてこうした修練が行われるならば、長い目でみて、個々の実用的な知識の獲得よりも、その人にとって、また社会にとって本質的に役に立ち、ここにこそ大学の教育機関としての真の意義があると信ずるのである。

3

以上が最初の設問に対する私のつたない説明であったが、顧りみてわが学部の現状を思ふならば、理想から甚だ遠いことを残念に思ふ。知識の伝達の面においても不十分であり、まして学生を自自学自修せしめる修練の面においては極めておざなりである。教授は他の教授が何を教えているかを知らず、科目間相互の連繫、授業内容や方法の相互研究は甚だ薄い。担当科目は教育のための公的なものとしてあるよりも、他から窺うべからざるものとして、私物化される傾向がないでもない。何を研究するかよりも、何を担当しているかがより大切であり、一旦きまった講義科目は助

手時代から退職するまで自分の全生活を保証する私域である。他人の域について語ることはタブーであり、各人は自分の域にとじこめることを要求され、またその限りでは絶対安全である。域の実力や中味がどうであれ、学生の反応がどうであれ、域の中では天下泰平である。こういう「城主的」、「家元的」傾向は、閉鎖的非流動的な日本の学界全体の共通の問題として長らく提起されてきた所であり、そこには日本の伝統的社会に合致した存在理由もあるから、これを急に変革しようとしても、却って別の矛盾を生む事も予測されるが、次第に改善しなければならない事は明らかであろう。

しかし私は決して悲観してはいない、わが学部は様々の欠陥にもかかわらずまた様々の意見の不一致にもかかわらず、優れた雰囲気にも恵まれている。既に同僚の入江教授も、本誌で大胆な提起を行われたが、私のような若輩までが、自由に発言できるといふことが何よりも感謝であり、今後名実共に備わった立派な学部にしてゆく責任が痛感されるところである。

（経済学部教授・西洋経済史）

われら同志社

ライフルマン

星 名 倫



初の五輪選手

一九六四年の八月三十日は、わが同志社射撃クラブにとって忘れることの出来ない日となった。この日、われわれ同志社ライフルマンの中から初めて宿願のオリンピック選手が生まれたのである。綿貫甫（ワタヌキ ハジメ 二五歳）、それが彼の名である。月並な表現だが、この栄光は唯に綿貫個人のものであるのみならず、今日の日まで同志社射撃クラブの光輝ある伝統を築き上げて来た数多くの人たちに神の与えたもうた賜なのである。

思えば今から十有余年の昔、戦後の荒廃がようやく治まらうとしていた世相の中で、忘れ去られようとしていたライフル射撃を、戦前・戦中の軍事色濃い競技からスポーツ射撃へと脱皮させ、日本体育協会の一翼に再び射撃協会の名を刻んだ功労者、伊吹平助、本田正一両先輩をはじめ多くの同志社ライフルマンたちが、今日の基礎を築いて以来、ある時はアジア大会に感激の日の丸を揚げ、また、ある時は世界選手権大会に駒を進め、また幾度か日本記録を更新し、かくして今日の日本射撃界の発展のために尽された努力の花が遂

に見事に結実したのだといえよう。

八月三十日の夕刻、東京八重州の「紅花」に集った二十名のOB、現役たちが「綿貫の選手決定」の報に期せずして喜びの乾杯を交わしたのも今日までのわがクラブの粒々辛苦の歴史を知る者には容易にうなづけることであらう。

遂に来た日

オリンピックまであと〇〇日、と永い間数えつづけて来たその日が、あと三日にあと一日にと迫って十月十日に遂に待望の開会式がおとづれた。数日の間東京の空を覆ってわれわれを心配させた雨雲もうそのように去って、晴れやかな秋空の下に世紀の祭典の幕は華やかに切って落されたのである。

正面スタンド中段の青いシートの一つが私のために設けられた招待席である。すぐ右手のロイヤルボックスは天皇、皇后両陛下が着席されて睦まじ気に談笑しておられるのがよく見える。そのすぐ横でむづかしい顔をしているのはブランドン・シ会長である。天皇随員の中に病魔に見舞われた悲運の宰相池田勇人氏の姿も見える。十年前に、いや一年前にす

ら生涯オリンピックをこの眼で見ようとは夢にも思っていなかったこの私が、今こんな場所までこうして現実にはオリンピックの開会を待っている。本当に信じられぬ思いであった。寄らば大樹の陰という諺があるが、同志社で射撃をやったればこそ今日のこの幸運、この感激は生涯私の胸を去ることはないだろう。

やがてギリシヤを先頭とする九十四カ国の史上最大の選手団の入場がはじまる。色とりどりの制服に身を包み、それぞれの祖国の栄光を背に、時には四、五百にもおよぶ大デレゲーションが、また時にはたった一人の参加代表が自分達の国旗と共に私たちの前を通って行く、そして最後にひときわ高い拍手をあげて、深紅のユニフォームの日本選手団が入場する。あの選手たちの誰かは遠く北海道から、あるいは九州から馳せ参じた若者たちなのだ。そしてまた、幾人かは京都の今出川のあの赤練瓦の同志社の校舎の中ですれ違ったかもしれない人たちののだ。私は万感胸に迫る思いで惜しめない拍手を彼らに送ったのである。

バベルの塔

十月十五日にいよいよ待望の射撃競技が始まった。試合に先がけて行われた国際審判員会議で私は面白い経験をした。この国際審判員のメンバーはハスラー会長ほか世界射撃連合三役の任命によるのであるが、今大会では米国からフィンレー理事、インドのガンگری氏、ソ連からアンドレーエフ氏、そして開催国日本から生田氏と私が選出されて都合五名で審判団が構成されたのである。この五人のメンバーの構成を見ると英語圏四人にロシア語が一人。必然的に会議は英語ということになった訳であるが、それでは意志の疎通が不可能なので、ロシア語の通訳を一人呼ぶことにしたわけである。ところが折角来てくれたロシア語の通訳が技術用語に関する知識が皆無である。仕方なしにアンドレーエフ氏の要求をいれて、会議の場を代々木選手村のソ連選手団の部屋に移して、ソ連側の推す通訳を入れたのであるが、この通訳たるや恐るべき能力の持主で、ガングリー氏の巻舌の英語や私の舌足らずの英語まで、聞くや否や機械のような正確さで即事通訳をする。これには

私もほとほと感心してしまった。また、ある時はアラビアから来たアラジンという名の語学の天才に通訳を頼んだのであるが、このアラジンの能力もソ連の通訳に負けず劣らずの大したものであった。アラジン氏との会話の一端を例にとつて、この恐るべき天才児の能力を披露すると、

「アラジンさんの日本語は上手だけど、どこで勉強したのですか。」「日本へ来る飛行機の中ですよ。」「冗談じゃない。そんなに短かい時間でどうして日本語が覚えられますか。」「へへ、そこがアラジン、不思議なランプの力です。」「といった具合である。

「アラジンさんは何か国語出来るのですか。」「私は七カ国語をやりますよ。」「何処とどこ。」「まずアラビヤ語、それに英、仏、独、伊、日本語ですよ。」「それじゃもう一つは。」「へへ、落語でやんす。」「一番頼りない日本語ですらこの調子で謀る。あとはおして知るべしである。」

三つ葉のクローバ

大会初日のフリーライフル競技にわれらのホープ綿貫選手が出場した。陸上競技で京都

の河津が専門外の走り幅飛に回されたように、綿貫も試合前の不調がたたって専門外のフリーライフルにエントリーされたが、しかし、よく頑張つて二十八位に食い込んだ。初めての国際試合の雰囲気にも呑まれた感はあるが、最後まで健闘した闘志は讃えられるべきであろう。同志社からオリンピックに参加した十人の役員たちも彼の健闘に心からの拍手を送つたのである。

戦い終つて十八日、東京は銀座の聖書会館の四階にある同志社クラブの一室で、同志社射撃クラブ会長本田先輩、京都ク会長伊吹先輩、塩貝東京支部長らをはじめとして二十名に近い関係者が集まつて綿貫を囲む会が催された。三つ葉のクローバの旗高く同志社大学応援歌の合唱のうち、全国津浦浦浦から集つた同志社ライフルマンたちにとって、この夜は最上の夜の一つに数えられることである。

また逢う日まで

雨雲の低く立ち込める二十四日の夕、オリンピックの最後を飾る大賞典馬術に引きつづいて想い出多き第十八回オリンピックは暮

をわろした。

この日、私は閉会式に参加しない予定であったが、同志社の仲間たちが皆、閉会式に行くといふのでつい招待券を人にやっつけてしまったことを忘れて神宮の森へと足を向けてしまった。しかし驚いたことに幸運は又もや私の行く手を導びいてくれたのである。

友人たちが入場したあと、私は一人神宮の森を散策したのであるが、自然足は国立競技場のゲートに向つた。そして何とか入場の機会はないものかと思案しながら立ちつくしていたのだが、やはり神は私を見捨てたまわず、奇跡が起つたのだ。競技場役員の一人が私の国籍を間違へて親切にも私の側へやつて来て、こういつたものだ。

“Can you speak English?”

私はだまつてうなずいた。別に悪気があつたわけではない。ただこの二週間英語の世界に暮らした習慣がふと出てしまつたまでである。彼女は親切に一生懸命英語で話しかけた後で、お困りでしょうかといつて役員用の予備の入場券を一枚もつて来てくれた。きつと勝手のわからない中国かどこの役員が困つていたので思つたらしい。私は恐縮して

思わず日本語で「有りがとう。助かりましたよ。」と礼をいってしまつた。私はあの時の彼女のキョトンとした顔が忘れられない。一瞬の後、私は事の異常さにあわて、親切な役員に恥をかかしたのではなからうかと恐れ、もらつたばかりの入場券を持って大急ぎで人の渦巻く閉会式の会場へと走り込んで行つたのである。ともあれ私はかくして国立競技場のアンツーカーに特設された来賓席につくことが出来た。そして国旗の入場に、ベルギーやノルウェーの役員たちと手をとりあつて感激の涙を流し、なだれ込む選手団の中から知己を見つけては再会を誓う握手をかわし、暗黒の中にゆれ動きたいまつの火と螢の光の合唱に青春の胸をとどろかせ、いつかまたこの人たちと地球上のどこかで逢うであろうことを想いつつ、世界は一つの感に打たれたのであつた。

そこにはすでに対立する二つの世界もなく、スポーツを通して崇高なる一つの目標に青春を捧げた者のみがある満足感が溢れていたのだ。オリンピックは、やはり、参加することに深い深い意義があつたのである。

(女子中高教諭・英語)